第21回　アクラスZOOM寺子屋

著者との対話『中学生のにほんご』

永田晶子・武一美・志村ゆかり

に

に

第21回　アクラスZOOM寺子屋

今日の流れ

① チラシに書いた教材の特徴の確認と補足
② 2名の著者の自己紹介（主に活動内容）
③ ①と②を踏まえて、ブレイクアウト
④ 全体で共有

第21回　アクラスZOOM寺子屋

①チラシの中で・・

柱1：CLD児の「年齢とことばの学び」
柱2：「ことばの学びと教科（専門分野）の学び」

＋さまざまな支援と学習の環境を考慮した構成
＋著者メンバーの多様性

第21回　アクラスZOOM寺子屋

日本語の総合教科書を作ろうと思ったきっかけ

著名な専門家、大学などは施策を議論（ロビー活動）

言語以外は？
弁護士会、人権学会、政治のシンポジウム

現場は？
学校も支援団体も混とん

実際の子どもたちは？

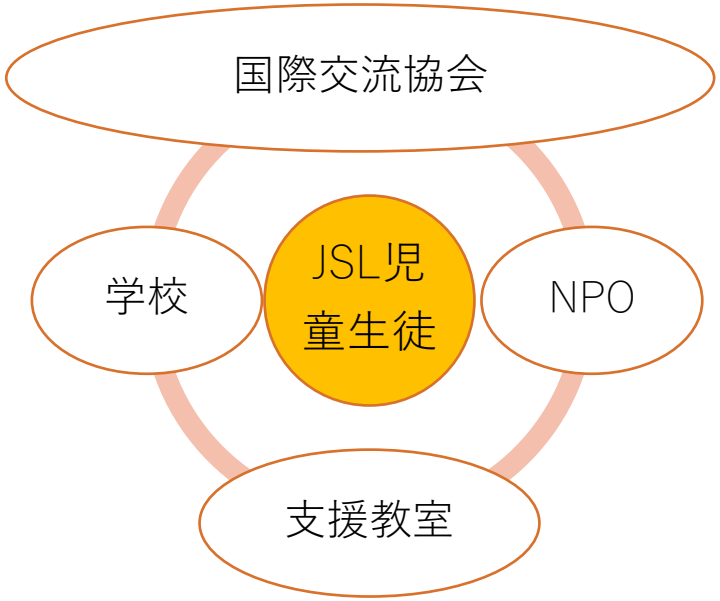
学会では、みんな
泣きが入っている

母語も大事だけど‥
日本で生きていくなら、日本語
無視できない！‥でもなんか
教える側の日本語の捉え方違
う気がする‥

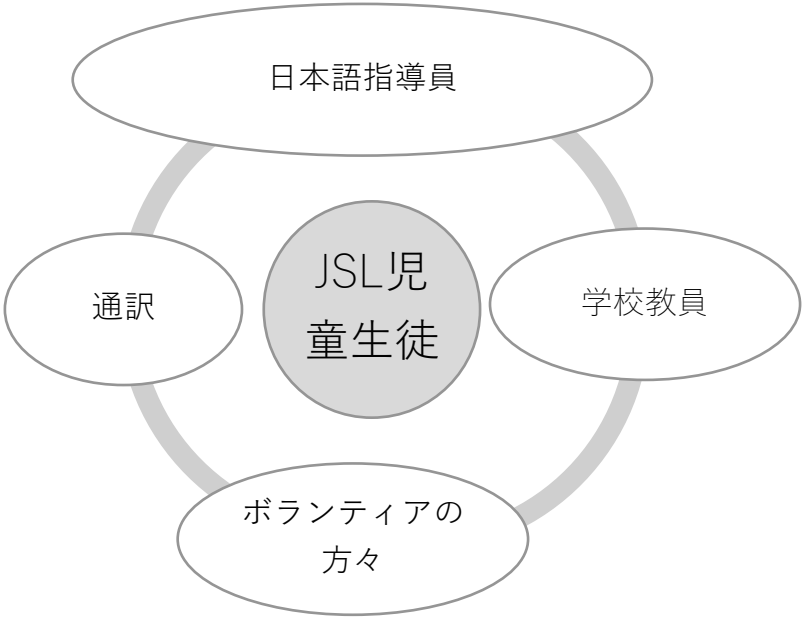
第21回　アクラスZOOM寺子屋

支援の多様性

団体、組織の例



サポートする人の例



第21回　アクラスZOOM寺子屋

日本語の学びの体系化が必須
日本語の総合教科書を作ろう

（チラシ）

＋さまざまな支援と学習の環境を考慮した構成

→導入がある・子ども自身の発話につなげる

→＋著者メンバーの多様性と専門性

第21回　アクラスZOOM寺子屋

総合教科書の対象は？
小学校？中学校？高校？

（チラシ）

柱1：CLD児の「年齢とことばの学び」

→言語とは何か？

→言語形成期、認知発達、キャリア（受験）→中学

柱2：「ことばの学びと教科（専門分野）の学び」

→教科学習とは何か？

→認知発達

→教科の世界で使われる日本語への橋渡しのための研究

第21回　アクラスZOOM寺子屋

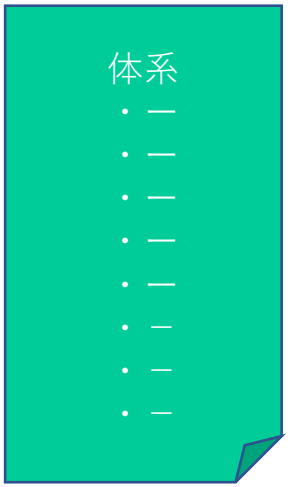
体系化する

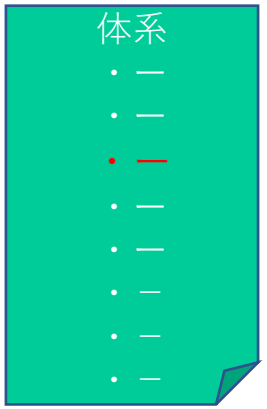
→全体像が見える

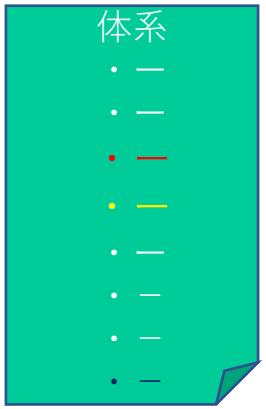
→各児童生徒の現状がみえる

→これから何をしたらいいのかという目標が立てられる

→どうサポートしたらいいかという道筋が立てられる







第21回　アクラスZOOM寺子屋

学習の道筋の提供（提案）

ステップ1

個の発信
日常生活・学校生活

基礎的な文型
基礎的な表現
基礎的な語彙

ステップ2

教科につなぐための
身近な社会・文化

機能語
文末表現
社会性を持つ語彙

ステップ3

教科で求められる
専門性，抽象性
（国・社・理・数・英）

特徴的な談話構造
特徴的な機能語
特徴的な文末表現
特徴的な語

場面・対話　　内容把握・意見　　教科本文理解とまとめ

文脈で学ぶ・リテラシー重視

第21回　アクラスZOOM寺子屋

現場の現状に対応

①教える方へ

→文型の導入、練習の流れを提供し、会話につなげやすくしている

②学ぶ生徒へ

→1人でも日本語学習を進められ、学んだ日本語を使って自由に話したり書いたりする

③生活言語から学習言語へつなぐ

→3段階のステップを踏んで、教科を自律的に学べるようにすることを目指して設計している

※ステップ1→2→3で、グラデーションが「読む」「書く」へ移行

第21回 アクラスZOOM寺子屋

子どもの日本語指導のポイント

（ピンクの箇所は『中学生の日本語』の特徴）

☞子どもは文脈から物事を推測し、学ぶ力を持っている。
（それを楽しむ）

文脈：時・場所・相手・場面・話の流れ
いつ・どこで・だれに・どんなとき、どんなふうに

第21回 アクラスZOOM寺子屋

現場から見えたこと

彼らの目線で捉え，彼らの学ぶ力を信じる姿勢が大切

寝たり寝たり寝たりします！

8時間寝ても眠い？
私はいつも9時間寝る・・

陳は井の中の蛙！

ぼくは1000さい！

自由な発想で楽しむ　　ウケを狙う　　立ち止まる

第21回 アクラスZOOM寺子屋

子どもたちの考える力が育った。
諦めず、最後までがんばる姿勢が育った。

2017年 横浜吉田中学校 国際教室担当教員談

第21回 アクラスZOOM寺子屋

② 著者の自己紹介（主に活動内容）

永田晶子
武一美

③ブレイクアウト

永田：『中学生のにほんご』の使い方、広げ方
武：CLD児のライフストーリー、高校における支援体制
志村：言語習得、認知発達と子どもたち（現行の制度に触れながら）

第21回 アクラスZOOM寺子屋

言語習得、認知発達と子どもたち
ー現行の制度に触れながらー

「日本語」の捉え方

「日本語」「ベトナム語」「英語」といった捉え方

生きるためのことば（日本語）

人間関係をつくる

自分を表現する

社会に参加する

＋

（成長過程）認知発達に影響する

（成長過程）言語形成期を考慮する

複言語・複文化

バイリンガル

母語・継承語

成長過程にあるこども ー認知発達ー

認知発達の4つの段階　ジャン・ピアジェ　参考文献(1)

1感覚運動期 ： 出生から1歳半～2歳

2前操作期 ： 1歳半～2歳から7歳

3具体的操作期 ： 7歳から11歳

4形式的操作期 ： 12歳から成人

成長過程にあるこども－言語形成期－

中島和子参考文献（2）

言語形成期　前半					後半
年齢	０～２	２～４	４～６	６～９	９～１５
時代	ゆりかご	子ども部屋	遊び友達	学校友達前半	学校友達後半

ゆりかご時代：親が自信のあることばで、愛情を持って話しかける

子ども部屋時代：双方向にやりとりが大切

遊び友達時代：ごっこ遊び（社会性）、ことばの分析（りんごを三拍子で捉える）、文字に興味を持つので「読み聞かせ」有効

成長過程にあるこども－言語形成期－

中島和子参考文献（2）

言語形成期　前半					後半
年齢	0～2	2～4	4～6	6～9	9～１５
時代	ゆりかご	子ども部屋	遊び友達	学校友達前半	学校友達後半

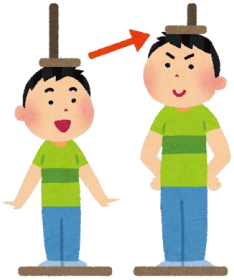
学校友達時代前半：話しことばが固まり、読み書きの基礎ができる

学校友達時代後半：自立心が旺盛、抽象的な内容も読める、ことばの分析力も急速に伸び、文化差の理解や比較ができる

成人の日本語指導と子どもの日本語指導の違い

【学び】　小学校中学年くらいまで：具体的

小学校中学年以降：抽象的・分析的



個人差がある

【心】

思春期にある

アイデンティティー
母語・母文化
友人・将来
親への思い　etc.

外国につながりのある子どもたちの呼称：多様

外国にルーツを持つ子どもたち

両親とも外国籍→子どもも外国籍

片親が外国籍→子どもは外国籍か日本国籍かまたは二重国籍

何らかの事情で届け出をしていない場合→子どもは無国籍の場合あり

日本語指導が必要な子どもたち

外国籍で外国育ちで来日

日本国籍で外国育ちで帰国

日本語しかできない外国籍の子どもたち：日本生まれで日本育ち

☞JSL（Japanese as a Second Language）児童生徒

（日本語を第 二言語として使用する児童）

CLD（Culturally and Linguistically Diverse Children）児

（文化的・言語的に多様な背景を持つ児童）

外国につながりのある子どもたちの特性：多様

国籍：ブラジル
母語：ポルトガル語
日本語：ペラペラ
来日：7歳

国籍：韓国
母語：韓国語
日本語：簡単な会話
来日：13歳

国籍：フィリピン
母語：タガログ語
日本語：ペラペラ
来日：2歳

国籍：日本
母語：中国語
日本語：あいさつ程度
来日：9歳

日本社会における取り組みの現状

「特別の教育課程」文部科学省（2016）

授業時数

日本語の能力に応じた特別の指導に係る授業時数は，年間10単位時間から280単位時間までを標準とすること。

「みんなの日本語」初級Ⅰ・Ⅱ
学習時間の設定：それぞれ100～150時間→合計で、初級学習に200～300時間

成人の日本語学習者の初級終了程度の時間数が，JSL児童生徒に保障されている最大限の授業時間数であり，彼らはその授業時間数で，「学習に取り組むことができるようにする」ことが目指される。

日本社会における取り組みの現状

生徒	出身	国籍	来日時期	母語	日本語力	家庭内言語
A	フィリピン	フィリピン	中学3年	タガログ語	ゼロスタート	日本語
B	中国	日本	小学3年	中国語	日常会話支障なし	中国語

架空設定:神奈川県在住、現在中学3年

中学3年という時期に来日したA

高校受験:日本語ゼロから対策／漢字対策重要／英語力を活用／特別枠で受験可能

家族:フィリピンでは家庭の役割分担も子どもに求めるケースが多い

小学校3年で来日したB

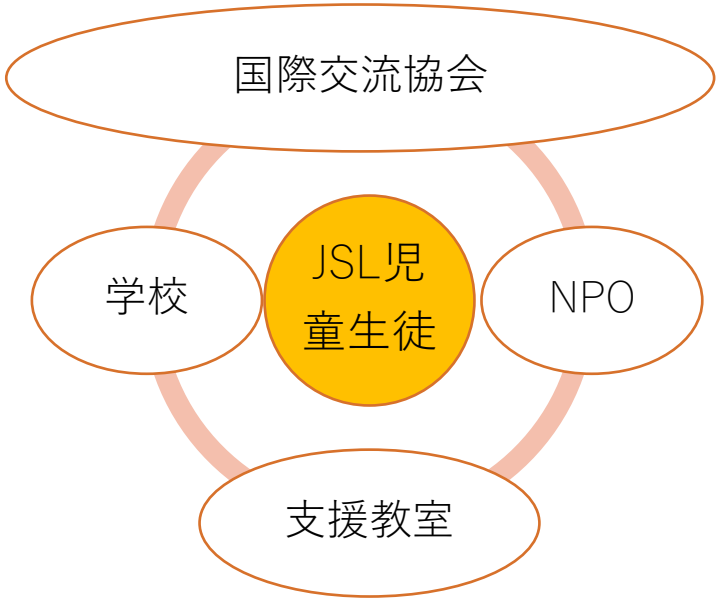
高校受験:日本人と同等／日本語指導終了／教科につなげる支援

家族:中国では同郷のネットワークも強いため,急に(時に海外へ)引っ越しするケースもあり,サポートが中断されてしまうケースもある

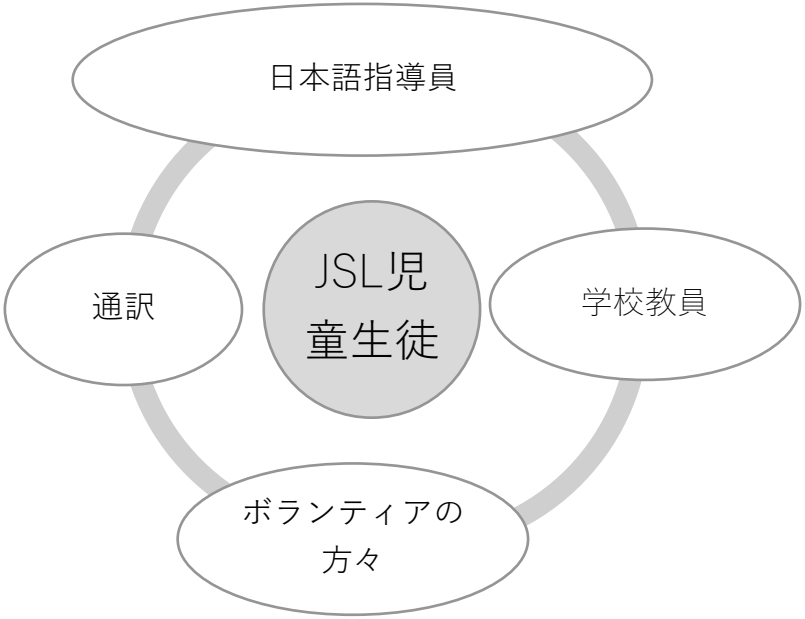
日本社会における取り組みの現状

支援の多様性

団体、組織の例



サポートする人の例



「日本語」の捉え方

「日本語」は教科の英語や国語とは違う

生きるためのことば（日本語）

人間関係をつくる

自分を表現する

社会に参加する

＋

（成長過程）認知発達・言語形成期を考慮する

文化の違い

引用文献

（1）『思春期ーその行動と発達のすべて』 監訳：林謙治 メディサイエンス社

（2）『完全改訂版 バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』
著者：中島和子 アルク